

書評

塚田泰彦

『語彙力と読書—マッピングが生きる読みの世界—』

上 谷 順三郎*

1. 本書刊行の意義—「読み」の教育のための海図—

本書は「読み」の教育に関する理論書である。と同時に、「読み」の教育に関する実践書でもある。研究史と実践史を背景として、現代的提案を行っている本書を、今後の「読み」の教育のための「海図」として評価したい。

まず、著者自身が読書心理学についてまとめた文章¹⁾から、本書の位置づけを探ってみたい。塚田は次のようにこの分野の研究課題を整理している。

○読むことのモデル

認知過程モデル（発達のモデル、情報処理モデル、相互作用モデル）

社会認知過程モデル（読者・テキスト・教師の関係）

相互関連モデル（社会心理学的観点からの読み書き関連理論）

情緒モデル（読みへの態度・信念についてのモデル）

○読むことの研究の対象（要素・レベル）

言語過程（言語獲得と読みのプロセス、意味の構築における対話の役割）

語認知（入門期の読みの指導）

理解・読解（テキスト構造と読み、語彙知識と読み、スキーマ理論、物語理解）

テキスト（説明的文章・文学的文章の読み）

読者反応（読者反応研究）

メタ認知（読みの方略の発達）

情緒的側面（読書意欲、相互学習による活動）

社会文化的側面（読みの社会的文脈、共同体と学校での読みの関連、民族誌的アプローチ、教師の役割）

読むことの能力・評価（読みのスキル、個人差・性差、発達段階）

読むことをめぐる文化的状況（読書調査・読書運動）

*鹿児島大学教育学部

コンピュータと読むこと（マルチメディア状況下での読むこと）

「読むこと」のモデル及び研究の対象としての「読むこと」を上のように整理し、これらの相互の関係を視野に入れたうえで、塚田は、自身の著作について、「内容面にかかわった研究」で「文章の語彙構造に着目した」ものと位置づけている。さらに、この分野での研究状況については、言語の単位ごとに考察する応用言語学的アプローチの不足も指摘している。つまり、塚田の研究は、特に日本での読書心理学の最前線にあつて、先導的な役割をも担っていると言える。

次に、本書の目次を見てみよう。

序章 研究の目的と概要

第一章 読みの教育の現状と問題の所在

第二章 パラダイムの検討による研究課題の定位

第三章 読みの語彙知識の関係—課題解決の原理的展望—

第四章 読みの教育と語彙意味論的方法の関係—課題解決的方法的展望—

第五章 読みの学習における意味マップ法の有効性

終章 研究の成果と課題

本書で展開される研究の目的と方法は次のようにまとめられるだろう。

読みの教育の現状として、「読解」指導と「読書」指導の二極化が認められる。この問題を解決するために、両者の共通基盤である「知識ベース」に、ここでは「語彙知識」に着目する。そして、文章を語彙を中心とした意味のネットワークと捉えることで、読者の持つ「語彙知識」の生かし方として「語彙意味論的方法」を提案する。これは、認知論的アプローチと応用言語学的アプローチを統一的に扱うことができる方法である。こうして、「読者が自らの既有知識を表現するマッピング活動を通して語彙構造体としての文章と出会えば、文章の理解は促進される」(p.9) という仮定が生まれる。

先に見た読書心理学の研究課題を踏まえて展開されている点でも、また日本の読みの教育の課題に込えている点でも、本書刊行の意義は大きい。

2. 本書の位置づけ—「読者論」的实践課題として—

本書の中で、塚田は、日本の読みの教育の研究課題を5つ挙げている (p. 33. 番号は引用者)。

①読解と読書の二極化の問題

- ②主題・形象の読みという文学作品偏重の問題
- ③作者・作品・読者の関係の変化への対応
- ④読みにおける読者の既有知識の役割の重要性
- ⑤読みにおけるコミュニケーション的特質の重視

ここでは①と③を中心に取り上げる。それは「読者論」的实践課題として重要な意味を持つと考えられるからである。

まず、①と③にかかわる説明を引用する。

これまで日本の読みの教育では、作者中心・作品中心の立場で「読解指導」を行い、一方、読者中心の立場で「読書指導」を推進してきたが、この二つの立場は性質を異にする面も多く、読みの教育での二極化を招いている。この事態については、現在、原理的な検討を加えることもこの両者を連絡する方法の開拓も不十分なままである。(pp. 7-8)

このような事態を招いた経緯は次のように分析されている。

読みの教育の目的や内容を議論する場合、しばしば読解と読書という二つの用語を区別してこれを対比的に用いることがある。その場合、読解は文章の意味を正しく理解する方法を学ぶための読みを指す。これに対して、読書は一冊の書物を単位とする読書人格の形成を目的とした生活的機能的な読みを指す。読解は読解の技能を習得する基礎訓練としての「学習読み」であり、読書はこの読解の技能を実際の目的にそって活用する応用学習としての「生活読み」である。学習者の視点から見れば、読解は分析的、受容的、客観的、その意味で没個性的なものとされるが、一方、読書は総合的、主体的、個人的で、目的を持った行為である点が強調される。したがって、読みの力としても読解力と読書力は区別される。読解力が子どもの発達段階をふまえた読むための知識や技能の体系として捉えられるのに対して、読書力の方はどちらかという知識や技能よりも目的を持って主体的創造的に読む場合の読者個人の行為的な側面が問題にされる。(p. 13)

ここには、「読解」と「読書」の対比が明解に図式化されている。こういった図式化しやすい理解の仕方は、国語教育関係者においても根強いものであろう。現行の学習指導要領「国語」で強調されている「読書に親しむ態度を育てる」も、実はまだ二極化されたままの「読書」理解と言えそうだ。塚田の指摘を受け止めて再考する必要があるだろう。そうしないと、「朝の読書」も「読書へのアニメシ

オン」も、学校現場における読書運動に終わってしまいかねない。読みの教育の転回が図られるべきなのである。

塚田は「テキスト独我論的な転回を『学習者論的転回』として具体化するということが本研究の目標である」(p. 56)と述べる。いわゆる読者論によって、作者・作品中心から読者中心へ、また教師中心から学習者中心へ、とその転回が図られてきたにもかかわらず、読みにおいて設定されるテキストに対して、読者の解釈の優位性が保障されないままだからである。言いかえれば、読者としての学習者が読みの教育において位置づけられていないということである。

読者としての学習者の位置づけ、すなわち学習者論的転回としての具体化については、本書をヒントに、私は次のようなことを考えている²⁰。

まず、「読むこと」自体の自覚化意識化が重要である。学習者が読者としての自覚を持って意識的な読書を行う。そういう理想的な姿に私たちは多くの期待をかけている。読書がそういうものとして行われれば、読書論や読者論も実効のある理論として認められることにもなる。作者・作品・読者の関係についてもこれまで提案を行ってきた²¹。学習者が「読むこと」自体の原理や面白さを自覚し、意識的な読書を通してお互いに交流できるような場として授業を位置づけたい。そういう場の実現に向けた構想について、以下に記してみる。

私は「読むこと」学習のアプローチを4つ設定している。

- ア 作者（作家）中心
- イ 作品中心
- ウ テキスト中心
- エ 読者中心

それぞれについて説明する。アは、作家の伝記的事実にもとづいて創作の意図の再構成を試みるアプローチ。イは、同一作家の作品群および同時代の他の作家の作品群からある作品を解釈するアプローチ。ウは、ア、イと切り離したものとして、すなわちテキストとして、そのタイトル、登場人物を含む設定、語り、特徴的な表現などを分析するアプローチ。エは、読者の経験史に引きつけたアプローチ。読書中に、これまでの体験（読書体験も含む）との関連を強く感じたり、自分の嗜好や連想が引き出されるような箇所を中心に読み解いていくアプローチである。

これら4つのアプローチを設定するだけでも「読むこと」の学習は成立するだ

ろう。しかし大事なことはいかに学習者を「読者」として位置づけるかである。作者中心、作品中心、テキスト中心それぞれのアプローチによる読み方を身につけたとしても、それらのアプローチによって読んだことを総合する、意味づける「読者」が位置づけられなければならない。また読者中心のアプローチを展開することができても、それだけでは他者との交流はできない。他のアプローチを共有する必要がある。つまり、4つのアプローチは、学習者が「読者」としてそれぞれのコンテキストに則って読むという設定なのである。めざしたいのは、読者が4つのアプローチを経て、あらためて読者としての自分に出会うということである。

読解（力）と読書（力）、読解指導と読書指導、といった二極化の問題を克服する具体的提案として今後も検討を加えていきたいと考えている。

なお、塚田の指摘している研究課題の②「主題・形象の読みという文学作品偏重の問題」についても少し触れておきたい。たとえば塚田は文章を「主題追求システム」と位置づけることで主題を機能的に捉えている。この点と③「作者・作品・読者の関係の変化への対応」とを関連づけて今後考えていきたいのが田中実・須貝千里の「新しい作品論、新しい教材論」の考え方である。たとえば「主題」の捉え方と作品・教材価値の問題、作品に対する作者と読者の位置づけなど、読者論などとの共通点・相違点を検討する観点となるだろう⁴⁾。

3. 今後の展望—言語教育基礎論として—

塚田の指摘する、日本の読みの教育の研究課題のうち、④「読みにおける読者の既有知識の役割の重要性」と⑤「読みにおけるコミュニケーション的特質の重視」についてはいくつかの動向を示して関連づけるにとどめたい。

言語教育の目標の一つとして、言語によるコミュニケーション力の育成を挙げることに問題はなかろう。その基礎・基本となるのが、読書力であり、さらにまたその基礎・基本となるのが語彙力である、と私は考える。本書で展開されている「読みの教育」論は、実は言語教育基礎論としても位置づけられるべきだろう。

井上一郎の『語彙力の発達とその育成—国語科学習基本語彙選定の視座から—』（明治図書、2001.4）も刊行された。また長編の会は読書と語彙とを結びつけた実践提案を行っている⁵⁾。読書力に関する本も出版されている⁶⁾。本書がこういった動向の方向づけに欠かせないものであることを強調しておきたい。

註

- (1) 塚田泰彦「読書心理学の成果と展望」(全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書, 2002.6, pp.305-309) 便宜上, 改行して引用した。
- (2) 拙稿「国語教育における『読書』『読者』の位置づけ」(日本文学協会編『日本文学』第52巻第1号, 2003.1.10, pp.51-57) 参照。
- (3) 拙著『読者論で国語の授業を見直す』(明治図書, 1997.3)
- (4) 拙稿「文学教育の方法論をめぐる問題—〈新しい作品論〉の検討を通して—」(日本国語教育学会編『月刊国語教育研究』351号, 2001.7.10, pp.28-33)
- (5) 府川源一郎・高木まさき/長編の会『合科的・総合的な学習のための読書関連単元33単元の実践とプラン』(東洋館出版社, 2001.7.5)
- (6) 齊藤孝『読書力』(岩波新書, 2002.9.20), 井上一郎編著『読書力をつける 読書活動のアイデアと実践例16 上・下巻』(明治図書, 2002.12)。

塚田泰彦『語彙力と読書—マッピングが生きる読みの世界—』

東洋館出版社, 2001年, 4,600円